

報 告

ワークショップ「健康情報を評価する」に参加して

浜田 美智代

2008年9月19日、兵庫医療大学において開催された日本図書館協会健康情報研究委員会主催のワークショップに参加した。参加者は28人（ほかに運営委員7人）で、うち日本医学図書館協会会員14人・日本薬学図書館協議会会員2人・近畿病院図書室協議会会員5人であった。近年、健康についての関心が高まっており、周りを見ると、健康情報があふれている。そのため、健康情報を評価し、取捨選択する作業が不可欠になってきている。図書館司書として、自館の図書・雑誌の選定のチェックポイントも踏まえて、どのように情報を評価するかについての研修を受けた。

最初に、杏林大学図書館、JMLA教育・研究委員長である諏訪部直子氏の講演があった。健康情報を評価するには、情報項目・情報内容・エビデンスなどの項目評価が必要である。そして健康情報評価フローチャートを使って、「具体的な研究にもとづいているか」「研究対象はヒトか」「学会発表か、論文報告か」「定評ある医学専門誌に掲載された論文か」「研究デザインはRCTや前向きコホート研究か」「複数の研究で支持されているか」などを評価する方法を学んだ。

講演のあと、各グループに分かれて、健康情報評価フローチャートを使って、実際に健康情報の記事を討論・評価し、その結果を発表した。

私のグループでは「緑茶・コーヒーに糖尿病予防効果 全国17,000人調査」という記事を検証した。一つひとつの項目を吟味していくと、

確かな情報であると思っていた内容が、不確実なものとなっていくことに驚きを感じた。情報評価を意識して、記事を読み進めると、今まで自分が新聞記事（活字）になった情報をなんと無条件に受け入れてきたことかと愕然とした。

今回のワークショップでは、巷にあふれる健康情報を評価することを通じて、個人的にも情報の評価がいかに大切か、大変勉強になった。これからの図書館運営に向けて、図書選定（図書館における医学健康関連図書の選定は、日本には確立した選定基準はないので、医学健康情報を提供する図書館が独自に一般向けの選定方針を作成する必要がある）や、利用者サービスのひとつとして行う情報提供に役立てていきたい。また、公共図書館の方とともに勉強できたことは、とてもよい刺激になった。日頃、病院の専門職を相手にしているが、公共図書館の方のように一般市民（患者サイドに立った）の視点を意識することも大切であることを改めて認識できた。同じ司書として、このような交流の場がもてたことは非常に有意義であった。